



## 里親啓発等フォスタリング事業に取り組んで

中日青葉学園 あおば館 課長 阿尾 匡晃

国が、社会的養護の対象となる子どもたちを育てる場所として、家庭養育である里親を優先する方針を出したことを受け、里親を増やすことが課題となっています。

愛知県は、令和2年度、初めて民間施設・団体を対象に里親啓発をする里親のフォスタリング事業を公募。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、事業の実施は、10月からの半年間となりました。

中日青葉学園は、将来的に、地域における子育ての拠点となる施設を目指そうと、フォスタリング機関の設置を検討しており、運営母体が中日新聞社である中日新聞社会事業団のメリットをいかすことで、効果的な啓発活動ができると考えて応募。事業を受託することができました。

事業内容は、2つの自治体を重点地域に選んで、啓発活動を行うとともに、登録に向けた法定研修を実施することです。毎月開催する養育里親体験発表会も、里親に関心がある方々に参加していただけるよう、夜間や休日に開催することが求められます。

中日青葉学園では、施設がある日進市と隣接する長久手市を重点地域としました。ゼロからのスタートであるとともに、新型コロナウイルス対策で不特定多数の方に呼びかけることが制限されるため、試行錯誤の取り組みとなりました。

まずは、近隣のスーパーへ行って、私たちの思いを聞いてもらうことから始めました。その結果、3つのスーパーで、里親を知ってもらう資料が入ったポケットティッシュを毎週配布することができるようになりました。

また、行政とも密接な連携をとることに努め、日進市では、17カ所の公共施設で里親啓発をPRするマスクケースを置かせていただくことができました。長久手市は長久手福祉の家で隔週の火曜日に啓発させていただいています。さらに、11月からは、大型ショッピングセンター2カ所で、毎月交代で実施。イオンモール長久手では、企業の社会的責任（CSR）活動に位置付けていただき、無料でブースをお借りすることができました。12月は2日間実施して、およそ1700個の啓発資材をお客さまに手渡しすることができました。

大規模啓発活動をしてみて、里親の認知度が低いことを実感しました。お客さんからは「犬ですか？」「何のペットですか？」と尋ねられます。私は「人です。子どもですよ」と答えると、引いてしまう方が少なくありません。「重たいなあ」と思う人も多くいると感じます。

里親というと、養子縁組をするイメージが強いですが、ある期間育てる養育里親の制度があります。そこで、養育里親をアピールして「数日の一時保護や、家庭に戻るまでの期間」、「戸籍にも入れないんですよ」と具体的に説明すると、今までとは明らかに違った印象を受けるようです。今後、いかに足を止めて見てもらえるかを考え、積極的なアプローチをしていきたいと思っています。

そして、啓発活動から養育里親体験発表会へつなげることが必要にもなります。養育里親体験発表会は、10、11月に計4回行いました。日進市長や市議会議員をはじめ行政の方も来ていただきました。しかし、正直、なかなか人は集まりません。知り合いに声を掛けて来ていただいたこともあります。関心を持っていただき、登録研修まで進んだ方もいます。里親さんの話を聞いて「やってみよう」と思ったそうです。なかなか人が来ないイベントのような気がしていましたが、「身近なところに関心を持っている人がいるんだな」と思いました。

養育里親体験発表会では、養子縁組里親さんと養育里親さんの2組の方に話をさせていただき、グループディスカッションをします。里親さんと話をするチャンスでもあります。このような機会を増やし、登録件数が増やしたいと思っています。

里親を増やすには、時間がかかると思っていますが、里親さんが安心できるホームタウンを目指したいと考えています。

